

（第1報） 福岡県における近郊やさい産地の形成と経営構造

上原 三郎・中島 健吾

（福岡県農業試験場）

UEHARA, S., NAKASHIMA, K.

(I) Study on the development and mechanism of vegetable - growing Farms in Suburb - Areas in Fukuoka Prefecture.

I. 調査研究のねらいと方法

本県下には福岡市（人口85万）、北九州市（100万）をはじめ10の中小都市があり、人口の集中、都市地域の拡大とともに、県下のやさい産地の大部分は近郊的産地の性格を強めてきている。本調査研究はこれらの産地およびやさい作農家が都市拡大に対応してどのように発展すべきであるか、やさい作経営をどのように近代化すべきであることを明らかにすることをねらいとした。

やさいの産地形成については「農産物市場(都市)を中心にし、近郊から遠郊、さらに辺境へと遠ざかるにつれて農業経営は集約的なものから粗放的なものに移行し、国民経済の進歩につれて市場への供給圏は拡大する。やさい作経営についてみれば、近郊には多毛作や温室栽培のような集約的経営が立地し遠郊には粗放な経営が立地する。近郊には鮮度を尊ばれるもの、輸送に耐えないもの等が立地し、遠くにはその反対のものが生産される」といった生産立地の論理が作用している。こうして形成された産地も県内外の産地との競争や価格変動、労働力の流出都市の拡大による農地の潰廃、公害、地価の騰貴、賃金水準の上昇、技術の進歩、消費者側の嗜好の変化、購買力の増加などの諸要因が相互関連しながらやさい作経営に作用して、産地の性格や農家の経営構造を変えていく。つまり一つの経営方式、一つの品目に着目すれば立地移動をする、県下のこれまで発達してきたやさい産地の発展の経過をたどり、そこで今後これらの産地およびやさい作経営がどのように発展すべきであろうか、その方向づけを試みたい。

第1の課題は青果物の生産統計、流通統計（市場月報）などを利用し、第2の課題のために本年度はつぎの4ヶ所を選定して経営調査を実施した。しか

し、やさい作経営は複雑であるので聞取調査は容易でなく、今回の調査も所期の目的を十分達成していない。この調査は44、45年度も引続き、他の産地を数ヶ所行うときに再度補足調査を行う予定である。

2. 福岡県におけるやさいの生産、流通について^{注1)}

本県のやさい類の作付延面積は、昭和41年2万ha総生産量38万tで、うち県内市場出廻量22.5万t、県外への出荷約1万t（金額で7.5億円）であるが、県内300万人の消費人口をまかなうには37万tを必要とし、不足分およそ15万tを県外から移入している。その85%は九州各県からの移入に仰いでいる。県内市場入荷量のうち県内産の割合は5年前までは70%以上を占めていたが、近年次第に県外移入量が増加し42年度には自給率は60%に低下した。供給範囲も拡大したが、とくに熊本、大分両県の進出が顕著で、大分の高冷地地帯からのキャベツ、はくさい、抑制トマトなどの出荷が増加している。しかし県下の産地は近郊産地としての強みをまだもっている。

このように本県は九州各県からやさいの供給を受け、産地間競争では受身の立場にあるが、同時に大消費地を指向して県外出荷にも力を入れてきている。その量はまだ1万t程度にしかすぎないが、いくつかの産地は出荷の重点を輸送圏雲に置いているところもある（朝倉町きゅうり、北野町にんじん、吉井町トマト、瀬高町促成なす、糸島郡いちご、津屋崎町カリフラワー等）。

さらに県内のやさい産地を福岡、北九州二都市を中心として同心円を15km、25km、50km、80kmと描き、それらの圏の中で位置づけてみると、福岡市も北九州市も等しく市場での占有率が低下してきている。つまりごく近郊に代って北九州では遠賀郡、鞍手郡嘉穂郡、さらに筑後中流域の比重が増してきている。福岡市を中心とみると市内の占有率がかなり低下し

筑後中流域のシエアが急速に増加してきた。とくにほうれんそう、ねぎ、しゅんぎく、レタス等の軟弱物も産地は筑後地域に移動しつつあるようである。

3. 近郊やさい産地の経営調査結果^{注(2)}

都市近郊やさい産地の実態と問題点を知るためにつぎの4ヶ所を選び、代表的やさい作農家2～5戸程度を選んで経営調査を行った。なお調査期間は昭和42年8月～43年7月の1ヶ年である。

(1) 福岡市堅粕地区……市街地園芸地区(軟弱やさい類)

この地区でやさい作農家とみられるものは50戸に満たない。やさい延作付面積は86haであるが、うち葉菜類(小ねぎ、ほうれんそう、つげな、しゅんぎく等)、洋菜類(パセリ、サラダナ、ミツバ等)が主体で、年間3～5毛作を行う農家もある。すでにこの地区は市街地、工場に取りこまれて衰滅の一手前であるが、高収益の軟弱やさい栽培技術の水準は北部の箱崎地区とともに高い水準にある。しかしやさい作りに熱心な農家は20戸程度に減少してきている。

(2) 宗像郡津屋崎町勝浦地区……水田裏作露地やさい(カリフラワー、漬物用たかな、キャベツ、たまねぎ、いちご等)

津屋崎は福岡市の北方30km、北九州市まで40kmの玄海灘沿海の町で冬は温暖で、排水のよい砂質土壤でやさい栽培に適している。近郊でも外圏に位置する純農村地帯である。昭和35年頃までは水田裏作に60%以上ものなたねが作られていたが、その後早生たまねぎ、早掘春ばれいしょが増え、昭和37年頃からたかな、キャベツなどが伸び、40年頃からカリフラワー、いちごの作付が伸び、カリフラワーは福岡市、北九州市はもとより、大阪、東京市場に共同出荷している。昭和41年12月～42年4月の津屋崎農協の共販量は221t、1,719万円で出荷先別にみると県内30t、関西158t、関東33tとなっている。作付面積は13haであるが、43年は20ha、44年の計画は40haを見込んでいる。たかなは作付面積は42年70ha

43年90haで、漬物業者との契約栽培で暴落した場合でも最低取引価格を2万円と決めている。キャベツは43年40ha、玉ねぎ14ha、早掘ばれいしょ11ha、いちご9haその他、畑地にはすいか、プリンスメロン、トマトも作られ、また煙草も18ha栽培されている。

(3) 嘉穂郡穂波町……水田露地やさいおよび水田の転換畑(にら、レタス)

筑豊地方の飯塚市近郊農村で、炭坑が繁栄した頃は手近な消費地にやさいを小売りに出かけてもうけたが、今日では北九州市を指向した近郊やさい産地の育成に力を入れている。この町には炭坑地帯には珍らしく専業農家が200戸(農家戸数880戸)あり、やさい農家も約200戸で、延面積は80ha、売上額18千万円に達している。にらの栽培を行っている技国部落の1農家は水田53a、転換畑55a計108a、家族労力2.8人で、にら32a、キャベツ11a、レタス21a計64aで1,095千円をあげ、うちにらで1,011千円をあげているが、日雇を延700人を雇っている。

(4) 遠賀郡芦屋町……台地畑露地やさい(粟屋部落)、海岸砂質水田露地やさい(田屋部落)

北九州市まで15km20kmの近郊やさい地帯で、粟屋部落は海岸に近い低い台地上に150haの畑地があり、粟屋部落はその中心にある。10年前基地設置の代償として畑地灌漑施設をつくり、スプリンクラー灌水で、夏まきにんじん、キャベツ、はくさい、にんじんなどを作り、高収益をあげている。

田屋部落のやさい作付地は10haほどの狭い耕地であるが、ねぎの周年作を主体のやさい作農家が20戸程ある。つげな、キャベツなどが組合わせ作られている。

注(1)福岡県園芸課 福岡農試 S, 44, 5, 「福岡県における近郊園芸と輸送園芸」および農林省農林水産技術会議事務局, S, 43, 3, 「近郊野菜の生産と流通—近郊農業の展開に関する研究(1)—」

注(2)福岡農試 S. 44. 3 都市近郊農業経営研究資料第1号「近郊やさい産地の形成と経営構造」